

自己革新としての〈学習〉過程

— 関係性の認識論と背理のコミュニケーション —

中井孝章

“Learning” Process as Self-transformation

— Epistemology of Relativity and Paradoxical Communication —

TAKA AKI NAKAI

1. 序 論

「自発的に行動せよ」¹⁾——この格率は近代的な教育心性を端的に示したものである。このテーゼは子どもたちに「個性的に考えなさい」とか「早く自立しなさい」という内容を表明しているが、それは学校教育的な心性が支持されるあらゆる教育実践の場において再生産され続けられている。一見、正当な価値理念とみなされるこのテーゼを分析すると、内容の是非とは別に、それがそれ自体に〈否定〉を含む自己矛盾的なメッセージであることが分かる。というのも、子どもたちが大人の命令する通りに、自分の力で文字通りに「自発的に行動しよう」とすると、結局大人の命令に服従してしまうことになり、「自発的に行動する（判断する）」ことに相反してしまうからである。つまり、子どもたちがこの価値理念を受容し、それを遂行すること自体、自己自身の自発的な行動それ自体を否定することになってしまう。後述するように、このテーゼには子どもからみてメッセージとそれを否定するメタ・メッセージが同時に両立不可能なものとして内包されているわけであるが、この現象はG. ベイトソンによって「ダブル・バインド (double bind)」と呼ばれた。但し、このダブル・バインドは日常の行為世界においてはそれを子どもたちが理解できなかったり、意図的に無視したりすることによって回避されることも少なくない。むしろ、ダブル・バインドは子どもたちが社会的な実践能力や対人関係の作法を身につける上で適度に必要なるものであるし、しかもそれが精神分裂病の病理現象として現出してくるのは特殊な人間環境においてであると言える。その一例とは、母親が偽造された母性愛を介して幼児にかかわる場合や精神疾患をもつ人間と彼の家庭の人たちとの特殊な関係の場合であろう。

近代教育の価値理念とも言うべきこのテーゼは子ども

たちに極度の病理現象をもたらせることはほとんどないにせよ、このテーゼを通じて彼等を困い込み、彼等にある特定の学習様式と共に自発的服従という規律（ディシプリン）を強要していることは否定し難い。果たして、子どもたちがこの価値理念に惑わされることなく、自己自身の力で学ぶ様式を見出していくためには如何なる戦略を巡らせばよいのであろうか。それは子どものみならずあらゆる人間が、近代社会に特有なダブル・バインド状況を如何に超えていくかということの意味する。従って、この論文は、ひたすら完結化した形式体系に固執する従来の学習理論の限界を示すと共に、それをトランス・ディシプリナリーな形で超克したベイトソンのコミュニケーション論に基づきながら、近代的な教育心性、すなわちそれを端的に表現したダブル・バインド——後述するように、〈メタファーとしてのダブル・バインド〉——を超える自己の在り方（自己変容の様式）または〈学ぶ様式〉を模索していくことが問題意識となる。

本論文の構成を示すと、まず、IIでは、M. ハイデッガーの晩年の思索に基づきながら、サイバネティックスが西洋の伝統的な思惟体系に対して如何なる知的革命を及ぼしたかが、問われると共に、それ以後の哲学の使命が示唆される。これは存在論の立場からサイバネティックスのもつラディカリズムを科学技術批判を超えて冷徹に透視していくことを意味する。これに対して、サイバネティックスを精神のエコロジーまたは関係性の認識論の基礎として把握し、さらに、その認識論を従来の形式論理において軽視されてきた、〈差異〉と〈自己言及性（自己組織性）〉の主要な側面から主題化していくという、G. ベイトソンのコミュニケーション論が展開される。そこでは理解科学の〈自己関係性〉（〈解釈学的循環〉）が、〈自己組織性〉（〈円環的循環モデル〉）として明確に主題化される。²⁾

さらに、Ⅲでは、ペイトソンのコミュニケーション論がB. ラッセルの論理階型によって学習理論として展開される。この作業により、従来著しくレヴェルが混同されていた学習理論が整序されると共に、それを通じて自己の在り方あるいは自己変容の様式があらためて再定義されることになる。

そのことは同時に本来の学ぶ様式、すなわち自己革新としての学習を明確に規定することを意味する。それを通じて、自己革新としての学習が、教育の延長でしかない従来の学習と如何なる点で異なるかが明らかにされるであろう。自己革新としての学習が明確に規定されることにより、ダブル・バインド状況をはじめ、人間関係の上で錯綜する情報化社会を生き抜く方策が示唆されると共に、人間的共生のネットワークをしなやかに生成していく手法(術)が示される。繰り返すが、論理展開としては、できる限り忠実にペイトソンのコミュニケーション論に依拠しながら、ダブル・バインドを超える、自己革新としての〈学ぶ様式〉を解明していくことにする。

Ⅱ. サイバネティックスのエピステモロジー

——〈差異〉と〈自己言及性〉あるいは
〈自己組織性〉の問題群へ——

1. 哲学の終焉とサイバネティックス革命

——M. ハイデッガーの晩年の思索において——

「それ自身を設立し整立する諸科学が間もなく、サイバネティックスと称される新しい根本科学に依って規定され誘導されること、そのことを認識するためには何等の予言をも必要としない。〈サイバネティックス〉というこの科学は、人間の行動的—社会的本質をもったものとして規定することに、呼応している。何故ならば、この科学は、人間の労働を可能な限りで計量し整え立てることを誘導することに関する理論であるからである。サイバネティックスは言葉を諸々の報道の交換のためにつくり変える。諸々の芸術は、情報の諸々の器具、それも誘導されつつ—誘導する諸々の器具になる。哲学がそれ自身を繰り返して、諸々の独立的な、しかしながらますます決定的に相互に伝達し合う諸科学になるということ、そのことは哲学の適法な完了である。哲学は現代という時代において終わる。哲学はその場所を、社会的に行動する人間形態の科学性の内に見出したのである。しかし、この科学性の根本趨性はそのサイバネティックス的な、すなわち技術的な性格である。」〔Heidegger, 1976: 64〕

このように、晩年のM. ハイデッガーが、「哲学の終

末と思索の課題」(『時間と存在(Zeit und Sein)』所収)において切実に語るように、サイバネティックスという新しい認識論の台頭により、従来の哲学は終焉をむかえることになる。それはハイデッガーがテクノロジーの世界支配により、あらゆるものが用立てられていく〔Heidegger, 1962〕ことに絶望し、哲学することを放棄するという皮相な意味において理解されてはならない。確かに、ハイデッガー自身、サイバネティックスをテクノロジーの次元において理解し、その動向について悲観的な判断を下していることは事実であるにしろ、彼にとって重要なのは、その先にある。多くのハイデッガー継承者が誤解しているように、彼自身の唱える哲学が終焉し、その使命を科学技術に譲渡したわけでもないし、サイバネティックスが存在的(=認識論的)に見出した〈差異〉または〈差別〉のレヴェル以前に「存在論的差異(Ontologische Differenz)〔Heidegger, 1929〕の問いが未だ残されていて、それを問い続けることが哲学の使命であり、思索の課題であると考えたわけでもない。サイバネティックス革命以後の哲学の使命または思索の課題が、〈存在論的差異〉の思索にあるとみなすことは、インド=ヨーロッパ言語文化の枠内で派生した特殊な問題であると言える。ハイデッガーが述べる〈存在の忘却〉を〈存在論的差異〉の忘却と同定すること自体は誤りではないが、J. デリダのように、サイバネティックスが問題化する〈存在的差異〉以前、すなわち二項対立以前に、〈存在論的差異〉が〈痕跡〉あるいは〈差延〉の問題として見出される〔Derrida, 1967=1970〕と考えることは論点先取の誤りと言わざるを得ない。従って、サイバネティックスにおける〈差異〉、すなわち現実が突きつける〈存在的差異〉——二項対立——が事後的にみるとその対立が派生物でしかないような原初の差異を問題化することが哲学の使命であるともみなすことは断念せざるを得ないと言える。それでは、ハイデッガーが語る、サイバネティックス革命以後に残された哲学の使命(思索の課題)とは何であろうか。

サイバネティックスが突きつける問題は、きわめて現実的であり、それを各自が受け入れるか拒絶するかという意志選択のレヴェルを超過している。というのも、サイバネティックスは現実の世界すべてが〈差異〉から成り立つことをすべての人間に突きつけたからである。この世界観は最もラディカルなものである。サイバネティックスにあっては、アメーバから人間に至るまでその生命組織の機能や構造は共通しており、それらの間に単なる程度の相異があるに過ぎないことになる。その認識論は徹底した平等主義であり、すべては差異によって説明し

得るものとなる〔中井, 1989: 121-124〕。サイバネティックスが人間に突きつけたのは、このような、〈差異〉の一元論であり、この尺度に従う限り、人間主義的な世界理解はすべて無効となってしまふ。ただ、この点にテクノロジーによる暴力を見出し、それを批判していくとしても、その試みは必然的に単なる反科学主義に陥ることになる。換言すると、反科学主義は人間主義であって、現実の世界が突きつけることに眼をそむけ、時代錯誤的な理念に逃避してしまうことにならう。重要なことは、ハイデッガーのように、サイバネティックスが突きつける現実を直視し、その知的革命を真剣に問い直すことである。

サイバネティックスがもたらす知的革命を真剣に問うとき、まず考えられるのが、事物や事象、ひいては世界の成立根拠を「人間 (= 個人)」、「理性」、「意味」によって基礎づけてきた従来の人間学的なまどろみから解除していくことである〔内田隆三, 1984〕。とりわけ、近代的な知の形態に通底する「個人 = 人間」という形象は、その意識の働きを通じてあらゆる事象の存立根拠とみなされ、絶大な力を付与されてきた。その意味では、〈生きられる経験〉を主観性と客観性とがそこから分離され、抽象化されてくる根源的な経験の基底として発見し、科学技術的な世界を基礎づけることを試みた、良質の思考形態である現象学あるいは解釈学であっても、多様な可能的世界や象徴秩序 (コスモロジー) をポジティブな意味作用の主体としての意識に遡及させて基礎づけようとするため、かえって、その意識との志向的な関係及びその閉域の内部において世界を認識 (または理解) してしまうという事態を招来させてしまうことになる〔中井, 1989: 303-304〕。現象学では、依然として意味作用の主体としての意識が「個人 = 人間」という基体の実定性・統合性において保持されたままであり、その〈外部〉に世界を見出していく可能性が失われている。その意味では、構造主義もまた同様である。構造主義は、現象学とは異なり、意味作用する主体としての意識を否定し、さらにそれをF. ソシュールの言語哲学に代表されるように、形式的体系の差差的関係 (差異システム) に解体していく〔丸山圭三郎, 1981 / 立川健二, 1986〕。しかし、その差異システムを構造という統一態として描出してしまふという意味では、現象学あるいは弁証法をネガティブな単位へと転倒させたものに過ぎない。

かくして、現象学や構造主義をはじめとする近代の編制——いわゆるハイデッガーの後継者たち——は、「個体 = 人間」というヒューマニズム (あるいは価値理念) を扨拭し得ず、結局のところ、サイバネティックスが突

きつけた知的革命を晩年のハイデッガーほど真剣に受けとめることができなかったと言える。再び、ハイデッガーが捉えたサイバネティックスにおける知的革命に戻ると、彼自身、すべてを差異に還元し尽くすサイバネティックスの認識論上の大転換を現実の問題として真摯に受け留め、それを通じて従来の人間主義的なものの見方 (世界理解) を徹底的に解除していく。それは、あらゆる事物や事象を「個体 = 人間」という近代的な手垢にまみれた概念 (基体) によって根拠づける (基礎づける) ことを断念し、あらゆるものをあらゆる価値以前の原初において思索していくという彼自身の決意の表明とも言える。既成のあらゆる価値づけが無効となり、思索することがその原初においてなされるということとは、従来の価値が否定され、最高の価値が不在になると共にあらゆるものが平等化されるという意味で、価値の混迷する状況あるいは価値が相対化される事態であると言える〔中井, 1989: 121-124〕。これはニヒリズム的な状態あるいはニヒリズムそのものであるとは言え、新たな思索を開示しているという点では、決してネガティブなものとは言えない。それは絢爛たる形而上学 (伝統的な存在論) の神殿が崩壊した後の廃墟から思索しはじめるというイメージに近い。

このように、サイバネティックスは、あらゆるものの根拠づけが喪失された時代精神を象徴する思索の形態に他ならない。つまり、それは従来の哲学が研究対象としてきた存在論的な問題を主題化せず、回避して、現実の世界で生起する存在的な問題を専ら主題化していくという戦略をもつ新たな思索の形態であると考えられる。換言すると、サイバネティックスは柄谷行人が的確に論じるように〔柄谷行人, 1983: 105-106 / 1985: 156-160〕、西洋の伝統的な思惟としての形而上学 (メタフィジックス) が自己言及的な形式体系から不可避的に生じる無根拠性をメタ・レヴェルとしてのアイデアを設定することにより問題化せず、隠蔽し続けてきたことに対して、現実世界の変容をもってその虚偽性 (無根拠性を隠蔽するからくり) を暴露したと考えられる。さらに付け加えるならば、メタフィジカルな思惟は、オブジェクト・レヴェルとメタ・レヴェルの論理階型を持ち込み、前者を後者 (アイデア) によって根拠づけることにより、自己言及性 (自己差異性) を禁止してきたと言える。このとき、論理階型の導入により、形式化 (自己差異化) において不可避に発現してくる無根拠性または決定不能性は隠蔽され、忘却されてしまうことになる。このことからみると、ハイデッガーがサイバネティックスを通じて決意したことは、メタフィジックスが公然と行なう自己言及性の禁

止を存在論的に廻行することにより、禁止の下に隠蔽されている無根拠性・決定不能性の状態を見出し、そこに留まろうとすることに他ならない。むしろ、彼にとって存在者の存在（存在性）がアイデアと同定され、実体化（基体化）され、あらゆる事物や事象がそれによって根拠づけられるとき、思索は完結する。ここから、聊か逆説的ではあるが、サイバネティックスはその安直な根拠づけの虚偽性を暴き出し、すべての人間が、あらゆるものをあらゆる価値の原初において思索し得る場所にまで廻行することを可能ならしめたと言えよう。ハイデッガーの言う存在の忘却は、このような文脈において深く理解される必要がある。

繰り返すが、このようにサイバネティックスは、あらゆるものがその根拠づけを喪失し、あらゆる価値づけ以前の原初において捉え直される場所を開示することを可能ならしめる思索の形態である。しかも、それは存在論的な問題を主題化することなく、回避し、現実的に世界で生起している存在的な問題、とりわけ差異へと焦点移動を行なう。それとハイデッガーの言う思索とは、ほど遠いものであるにもかかわらず、メタフィジックスのように論理階型を持ち込むことなく、あらゆるものの根拠づけを喪失した状態があるがままに直視していくという意味では（両者は）通底していると考えられる。両者は、その思索の結果として、存在根拠を特定の実体にも求めることなく、（自己言及的な）形式体系の〈無根拠性・決定不能性〉（「ゲーデルの不完全性定理」またはそれを一層拡張して「ゲーデルの問題」〔柄谷行人、1983；102〕）を暴露させることになったのである。

以上のように、サイバネティックスの知的革命とその影響を変貌する世界のなかで真っ向から受け留めざるを得なかったハイデッガーの思索を中心にして論述してきたが、この認識の上に立ちながら、存在論的な問題を主題化することなく、回避し、現実の世界を存在的なレベルにおいて問題化していくことのできる、サイバネティックスの認識論をベイトソンのエコロジカルな思索を手がかりにして解明していくことにする。ベイトソンは、誰よりも逸早くサイバネティックスを認識論的に問題化し、応用してきた理論家である。今日では、サイバネティックスが軍事上の重要な武器として応用されたり、技術的な側面で情報処理機械の発展に貢献したりしていることは、周知のことであるが、反面、それが哲学的に、あるいは認識論的に如何なる意味をもっているかについては前述したハイデッガーやベイトソン以外に充分思索した理論家はほとんど見出せないと言える（但し、その創始者であるN. ウィーナーにはこれとは異なる意味で深い思

索がみられる）。ハイデッガーが西洋の伝統的な思惟のなかでサイバネティックスの意味を受け留め、思索したとすれば、ベイトソンは諸科学を横断する知の新しい形態、すなわちそれのもつ個々の専門領域を超えた、共通の認識論的な意味を見出したと考えられる。但し、サイバネティックスに対する評価としては、ハイデッガーが自らをニヒリズムの只中に参入させていく過程においてその本質を把握するという意味において悲観的であるのに対して、ベイトソンは自然と精神を一元的に捉え得る（記述し得る）認識論の基底としてその本質を把握すると言う意味において楽観的であると言える（ここでは、両者にみられる相異以上に、両者が共通なものとして見出した、サイバネティックスにおける認識論的パラダイムの転換の意味を重視すべきであろう）。ベイトソンの思索は素朴なものでありながら、かえって高度に技術化され、組織化されたシステム理論よりも根源的にそれがもつ意味を把握していると言える。次にベイトソンが捉えるサイバネティックスの認識論を論述していくことにする。

2. 認識論における〈直線的因果モデル〉から 〈円環的因果モデル〉への転回

—G. ベイトソンのサイバネティックス認識論の 基底—

サイバネティックスが存在論的問題を主題化することなく、回避するということは、ベイトソンによって次のように捉え直されている。「ひとりの生きた人間の、生きた現実のなかで、存在論と認識論とは切り離すことができない。世界とはこういうものだ（what sort of world it is）という（通常無意識レベルの）思い込みが、世界をどのように捉えそのなかでどうふるまうか（how to see and act）ということを決定するわけだし、逆に、彼の知覚と行動のありかた（how）が、世界の何であるか（what）を決定するわけである。一個の生命体として人間は、ひとつの「存在＝認識論的」な前提の網目のなかに囚われている。」〔Bateson, 1972=1987；450〕つまり、ベイトソンにとって人間のあらゆる行為は認識論的な前提と切り離すことは不可能であり、すでにビルト・インされた認識装置——その安定したままとまりが常識——によってある程度限定されていることになる。むしろ、存在論的な問題が認識論的な問題とは無関係にそのものとして存在するとみなすこと自体、すでにある特定の認識論的な枠組みに囚われていることを示していると言える。

さらに、ベイトソンからみてサイバネティックスがもたらす認識論は、従来のモダンな認識論を超えている。すなわち、従来の認識論が、普遍・特殊、一般・個別、客観・主観というように、「二分法を二項対立として位置づけ、一方を他方よりも優れたもの、価値あるものと序列づける」〔今田高俊，1987；15〕という「直線的因果モデル」〔亀山佳明，1989；102〕であるのに対して、サイバネティックスの認識論は、それを批判的に克服する。その克服の仕方を分かりやすく説明するために、ベイトソンの次の具体例を提示しておくことにする。それはきこりが、斧で木を切っている場面を想定するというものである。

まず、〈直線的因果モデル〉に基づく限り、木を倒されるシークエンスを「自分が木を切った」と言うのである。そればかりか、“自己”という独立した行為者があって、それが独立した“対象”に、独立した“目的”を持った行為をなすのだと信じさえする。〔Bateson, 1972=1987；455〕あるいは、この一連の行為は次のように言い直すことが可能である。「『ビリヤード球Aが、ビリヤード球Bにぶつかって、ポケットに落とした』という言い方には、問題はない。そういう純粋なハード・サイエンスの記述によって、人間と木を含む回路の全周をめぐる出来事を説明しようというのであればそれはそれでよい。しかし、われわれの日常の言葉のなかでは、人称代名詞が登場し、それとともに精神が持ち込まれる。しかもその精神は人間の内部に囲い込まれてしまっている。一方で木はただのモノだ。とどのつまりには、“自分”が斧に働き、斧が木に働くとこととの類推から、“自分”までが“もの”として扱われるに至る。精神の物象化ということが起こるのだ。〕〔Bateson, 1972=1987；455-466〕

ベイトソンが記述するように、従来の認識論の前提（隠された枠組み）としての〈直線的因果モデル〉は、自己と対象、あるいは主観と客観を分離し、二項対立として位置づけた上で、自己あるいは主観を価値づけていくものでしかない。それによって帰結されてくるのは、その主観（自己）が対象と同じレヴェルの“もの”として物象化されてしまうことである。換言すれば、〈直線的因果モデル〉は、こうした一連の単純な行為ですら十分に記述し得ないことになる。というのも、このモデルは現実の世界を二次元の平板な形式論理によって記述しようとするために他ならない。立体的な世界は決して平面的な世界に還元し得ないことは言うまでもないが、たとえ、前者から後者への射影がなされたとしても、映し出されるものは、“もの”と“もの”とのメタリッ的な

関係及びその虚像でしかないであろう。

しかし、前述した例を次のようにサイバネティックス的に記述するならば、事態は一変してくる。

「斧のそれぞれの一打ちは、前回斧が木につけた切れ目によって制御されている。この自己修正的——すなわち精神的——プロセスは、木-目-脳-筋-斧-打-木のシステム全体によってもたらされるのであり、このトータルなシステムこそが、(超越的ではなく内在的な)精神の特性を持つのである。もっと正確には、・・・・・・〔木にある差異群〕——〔網膜に生じる差異群〕——〔脳内の差異群〕——〔筋肉の差異群〕——〔斧の動きの差異群〕——〔木に生じる差異群〕・・・・・・。回路を巡り伝わっていくのは、差異の変換体の群れである。その差異のひとつひとつが「観念」——情報のユニット——であるわけだ。〕〔Bateson, 1972=1987；455〕つまり、サイバネティックスの認識論においては、〈木-目-脳-筋-斧-打-木〉のトータルな、完結した回路とその回路内を次々と変換しながら伝わっていく〈差異=情報〉の全体を「精神」(mind)と規定する。ここで重要なのは、サイバネティックスで言う内在する精神とは、人間の主観や自己ではなく、「ひとつの差異がつつぎに新しい差異を生みながら——あるいは次の「変換形」に身を翻しながら——循環していく情報の伝達サーキット(またはその複雑なネットワーク)にはかなるものではない。〕〔Bateson, 1972=1987 “訳注”；455〕

ベイトソン自身、サイバネティックスを通じて情報一元論を提唱しているようにみえるが、実はその意図は、それ以上に〈直線的因果モデル〉から〈円環的因果モデル(相互的因果モデル)〉への認識論上のパラダイム転換にあると考えられる。今日の情報科学の発展からみて彼自身の唱える〈円環的因果モデル〉が、「エネルギー」や「エントロピー」の問題を充分考慮せず、純粋な、しかし素朴な認識論に固執しているようにみえても、なお学ぶべき点が少なくないのは、サイバネティックスを認識論上の知的革命として真剣に捉え、それによって従来の認識論の前提となる〈直線的因果モデル〉を克服しようとしたために他ならない。

ベイトソンが〈直線的因果モデル〉から〈円環的因果モデル〉へのパラダイム転換を実現するとき、その契機となるのは、時間の導入である〔Bateson, 1979=1982；76-78〕。換言すると、〈直線的因果モデル〉は形式論理を徹底させたものであるため、そこには変化あるいは変容という時間的な契機が欠落することになる。「原因と結果の連鎖が円環(あるいはそれ以上に複雑なもの)をなすとき、その連鎖を無時間的な論理に移し変えて記

述しよう（“地図”を書こう）とすると、矛盾に陥る。純粋な論理では処理できないパラドックスが生じてしまうのだ。」〔Bateson, 1979=1982 ; 77-78〕

例えば、ブザー回路でそのことを示すと次のようになる。〈A点で接触がなされれば、磁石は動く／磁石が動けば、A点の接触は切れる〉ということとなる。それを因果関係を示す「・・・ならば、・・・である（ない）」という論理形式で言い換えると、「接触がなされれば、接触は切れる」となり、さらにこれを記号で示すと、「Pならば、Pではない」ことになる。このことから、現実の世界は、論理が〈直線的因果モデル〉に還元される限り、時間が排除されることになり、十分に記述されることはあり得ない。それに対して、〈円環的因果モデル〉は時間の導入を通じて現実の行為をより厳密に記述することの可能性を開示せしめたのであるが、それに加えてより重要なのは、トータルで完結した回路を一回走査するとき、二回（あるいは二回なら三回、三回なら四回・・・）走査するときでは、その情報が質的に異なるということを明らかにしたことである。サイバネティックスの認識論では、この自己言及システムという特徴のために、回路上を一回走査した差異とその後さらに走査したときの差異とでは質的に全く異なることになる。これは連続的な量の上での相異ではなくて、非連続的な質の上での相異であると言える。次に、自己言及システムを必然的にビルト・インせざるを得ない、〈円環的因果モデル（サイバネティックスの認識論）〉で生じる差異のレヴェル化問題を解決していく方策として、B. ラッセルの唱えた「論理階型論」を——ベイトソンに沿いながら——導入していくことにする。それは同時にコミュニケーション論の枠組みにおいて学習理論を展開することになる。この節で論述したサイバネティックスの認識論は、コミュニケーション論のもうひとつの柱であると言える。

Ⅲ. 学習の階型理論の展開

1. 論理階型に基づく学習理論の構築

Ⅱで述べたように、世界を認識し、行為していくこと自体、逆に世界の本質を規定（限定）していくことになる。人間にとってそのことは例外であるどころかむしろ人間であるが故に、この「存在＝認識論的」な前提の網目のなかに強く拘束され、身動きできなくなってしまうと言える。しかし、その反対に、人間はその「存在＝認識論的」な前提の網目に囚われた自己を認識することを通じてその限定された枠組みから自己を解放していくこ

とも可能であると考えられる。それはⅡで再三にわたって論述したように、意味作用の主体としての意識を持ち出し、ヒューマニズムの立場から「個体＝人間」を最も有能なものとするのではなく、反対にそういう現実を受け入れなければならないことを意味するに過ぎない。し、ヴァイトゲンシュタインが的確に述べるように、それは、例えば「ひとは、しばしば、動物たちは精神的な諸能力を欠いているから話をしない、と言う。そして、このことは、「かれらは考えない、それゆえ話をしない」ということである。しかし、動物たちはまさに話をしないのである。もう少しうまくいえば、動物たちは言語というものを使わないのである——ただし、もっとも原始的な言語形態を度外視すれば。」〔Wittgenstein, 1936-49=1976 ; 34〕とすることに尽きる。ここで、世界を認識することが、世界が何であるかを学習することを意味するわけだが、この学習することと言えども、人間以外のあらゆるコミュニケーションからみて何ら高尚なものであると言えない。

このことを十分に考慮しながら、世界を認識することが世界の本質や構造を学習することであるという意味を解明していくと、まず考えられるのは、学習することとは、絶えず生成してくる事物や事象をある特定の観点、すなわち「存在＝認識論的」な枠組み（限定枠）によって意味づけていく作業であると言える。つまり、現実の世界は連続的かつ流動的で、それ自体としては取り留めもない混沌としたもの（アナログ的なもの）であるため、それが特殊な能力——直観等——によって直接把握できるとする神秘的体験を持ち込む以外には、認識不可能である。また、認識論の立場に固執する限り、I. カントが想定した「もの自体」を導入せざるを得なくなる。つまり、世界が人間にとって意味あるものとして認識されてくるためには、そのアナログ的なものに区切りを入れ、ひとつのまとまりへと分節化しなければならない。そのことは、理解科学における解釈学的循環（自己関係性）のように、全体を理解するためには、まず部分を知らなければならないということと同様である。ただ、世界に区切りを入れ、分節化していく（デジタル化していく）という行為自体、「存在＝認識論的」な枠組みに規定されるため、どうしても自己の思い込みに囚われた狭いものになる危険性がある。

しかし、このことを解決するものとしてⅡの終わりに述べた、回路上を走査する差異のレヴェル化が想起される。つまり、世界に区切りを入れ、分節化していく行為としての学習は、サイバネティックスの回路を走査する差異の度合い、精確には質＝レヴェルの高まりに準じて進展していくものとなる。学習を通じて、世界はデジタ

ル化され、ある事物や事象の流れはメッセージとして獲得されるが、そのメッセージは学習する主体の様々な状況、すなわちその区切り方や分節仕方——文脈（コンテキスト）——に依存していると考えられる。学習する主体が、如何なるメッセージを獲得し得るかは、実は彼が如何なるコンテキストにあるかということと相関的な関係にあり、どちらか一方を欠落させた学習はあり得ないと言える。繰り返すが、ここで言う、メッセージとコンテキストとの相互関係は、サイバネティックスの回路上を走査する〈差異＝情報〉のレベルの相異に対応している。しかも、それはまた前述したように、ラッセルの論理階型論を導入することにより整序されることになる（たとえ、晩年のベイトソンがそのことに悲観的であり、なおかつそれに代わり得るものとして、ブール代数を応用・発展させたスペンサー＝ブラウンの「指し示しの算法」〔Spencer-Brown, 1969=1987/長岡克行, 1984 a/1984b/Bateson, 1979=1982; 125/大沢真幸, 1988〕を見出していたとしても）。今一度、ベイトソン自身に基づいて要約すると、「精神過程においては、差異のもたらす結果をそれに先行する出来事の変換形（コード化されたもの）とみなすことができる。これら変換プロセスの記述と分類によって、その現象に内在する論理階型の階層構造が明らかになる」〔Bateson, G., Bateson, M., 1987=1988; 40〕となろう。論理階型論によって、学習（過程）を段階に区別する前に、学習（過程）の段階を区別する尺度を再度、確認していくことにする。

前述したように、学習すること自体、世界を区切り、分節化することによって一連のメッセージを獲得していく行為であったが、その行為は学習する主体のコンテキストそのものに依拠していた。つまり、如何なるコンテキストをもつかということが学習過程を段階的に区別する主要な尺度であって、その相異によってメッセージのもつ意味も異なってくるものと考えられる。しかし、その前にそのようなコンテキストが全く想定されないケースがある。それは、いわゆる「刺激－反応（S－R）」と呼ばれる最も単純な行動パターンで、原生動物をはじめ、動物や人間の条件反射反応・本能衝動にみられる。ベイトソンはこの学習過程を「試行錯誤によって修正されることのない（単純または複雑な）一切の行為が立つ領域の名」として〈ゼロ学習〉と呼ぶ〔Bateson, 1972=1987; 409〕。この〈ゼロ学習〉にあっては、コンテキストは一切考慮されることなく、メッセージとしての刺激に対して即目的・同一的な反応がなされてしまうために、学習する主体にとって如何なる選択可能性も残されていない。それは、いわゆる、学習以前の学習とも言うべきで

あろう。人間においてこの段階の学習は、除外されて然るべきであると言える。

このことから、学習することの始まりは、コンテキストとの関係が生じてから以後になることが予測される。つまり、学習とは、〈ゼロ学習〉のように、コンテキストに関係なく、メッセージに多対一という形の恒常的な反応をすることではなくて、コンテキストとの関係においてメッセージの持つ意味が多様に変化していくことであると言える。コンテキストとの関係においてメッセージが把握されるということは、学習する主体に応じてそのメッセージの意味が様々に解釈（この場合は、解読）可能または選択可能であることを意味する。想起すれば、Ⅲのはじめで論述してきたことは、すでに〈ゼロ学習〉を飛び越して、この段階での学習を前提にしていたと言える。つまり、〈ゼロ学習〉の上位に位置する、この学習は、世界で生起する事象の流れを学習する主体の現時点でのコンテキストに基づいて区切り、分節化していくことを通じて、メッセージの意味を決定（定着）させていく行為であると言える。ベイトソンの言葉ではそれは「反応が一つに定まっているもの」〔Bateson, 1972=1987; 418〕としての〈ゼロ学習〉に対比して、「反応が一つに定まる定まり方の変化」としての「学習Ⅰ」と呼ばれる〔Bateson, 1972=1987; 418〕。あるいは、それは「同一選択肢集合内で選択されるメンバー〔メッセージ〕が変更されるプロセスの名」〔Bateson, 1972=1987; 409〕である。反復するが、メッセージがコンテキストを通じて定まったとき、初めて意味が生成してくる。日常、頻繁に誤解されているように、世界に区切りが入られ、分節化される以前に、世界を直接全体的に把握可能であるとみなすことは、コンテキストの存在を無視したものに過ぎない。言語の存在根拠をバラ言語やキネシックスの内に求め、基礎づけることは論理的に誤りであって、特に、後者が関係に言及するという独自の働きをもつことを鑑みれば、後者は前者の進化に基づきながらも——あるいはそれと並行しながらも——、それとは独自な形で進化してきたものと考えられる。「キネシックスやバラ言語によるコミュニケーションが精緻化してダンスや音楽や詩になったように、夢の論理も精緻化され、演劇や美術としてわれわれのまわりに生きている。」〔Bateson, 1972=1987; 609〕

例えば、ベイトソンが挙げるように〔Bateson, 1972=1987; 419-420〕、バブロフの犬はこの〈学習Ⅰ〉の実現を示している。普通の人間が日常スムーズになし得るあらゆる行動、すなわちメッセージをその適切なコンテキストに基づいて解読していくことは、この〈学習Ⅰ〉

の所産に他ならない。パブロフの犬が示すように、犬は試行錯誤の末、たとえ肉片がなくても、ブザーの音が呈示されるだけで、唾液を分泌し得るようになったわけであるが、このことが意味するのは、犬がこのような特殊な状況を学習することに成功したということである。ただ、この場合、犬に与えられる刺激（ブザー）が一定化されているため、犬としてはその状況に慣れること自体、それほど困難なことではなかったであろう。しかし、次に犬が実験室とはまったく異なる（自由な）コンテキストに置かれるとき、その犬は新たなコンテキストを認識し得るであろうか。万一、この犬が実験室での条件づけに囚われることなく、異なるコンテキストを認識し、行動するようになる——例えば、怪しい物音が聞こえたとき、叱嗟に吠えるようになる等——とすれば、この犬は、〈学習Ⅰ〉の段階から一段上の新たな学習の段階に駆け昇ったことになると考えられる。これに関しては、ベイトソンが J. リリィと共に行ったイルカのコミュニケーションの研究のなかでのエピソードが印象的である。それはイルカに新しい芸当を思いつかせる実験を行なったときのものである。「（イルカが報酬なしに前回の動作を十四回も繰り返した後のできごとであった。）十四回目と十五回目のあいだの休息時間に、彼女（雌のイルカ）は非常にうれしそうなようすを体で示した。そして十五回目ははじまるや、いきなり八つの演技を入念にやってみせたのである。そのうち四つは、この種のイルカ（イワイルカ）では観察されたことのないものだった。ここでイルカは一つの跳躍を、つまり論理階型間のギャップの飛び越えをやったのけたのだ。」〔Bateson, 1979=1982; 167〕このエピソードのなかにみられるように、イルカは彼等が予想もしない芸当を彼女自身の力で思いついたのであり、コンテキストのメッセージを模索して、解読したのである。つまり、このイルカは、同一選択肢集合内で選択されるメンバーが変更されるプロセスとしての〈学習Ⅰ〉の段階を一挙に飛び越して「選択肢集合自体が変更されていくプロセス」としての「学習Ⅱ」〔Bateson, 1972=1987; 409〕へと一挙に跳躍したのである。今まで、同一のコンテキスト（選択集合）に固執し、その枠内でしかメッセージを解読し得ない段階にあった学習する主体にとって、初めてそのコンテキスト自身が変更可能であることに覚醒していくプロセスは、この上ない画期的なできごとであると推察できよう。というのも、「〈学習Ⅱ〉とは、〈学習Ⅰ〉の進行プロセス上の変化、すなわち選択肢群そのものが修正される変化や、経験の連続体が区切られる、その区切り方（punctuation）の変化」〔Bateson, 1972=1987; 418〕を意味するか

らである。換言すると、このような区切り方または分節化仕方の変化を通じて、学習する主体は自己自身が無意識の内に依拠する「存在＝認識論的」前提の限界に気づき、その枠組みから自由になる可能性に開かれるからである。しかし、未だこの段階に留まる限り、その可能性はたとえ予見されることはあっても、実現されるには至らないであろう。つまり、学習する主体が自己自身の依拠する「存在＝認識的」枠組みから解放されていくためには、「自己とは何か」という「全面的なく自己」の再定義〔プラブッタ, 1986; 33〕が学習論のなかで展開されなければならないのである。

以上、論述してきたように、メッセージのコンテキストまたはコンテキストのメッセージの論理階型論に基づく学習（過程）の段階的な分類は、〈ゼロ学習〉から〈学習Ⅰ〉を経て、コンテキストそのものを選択する段階としての〈学習Ⅱ〉まで示された。この、〈ゼロ学習〉から〈学習Ⅱ〉に至るまでの段階と、〈学習Ⅱ〉とそれを一段跳躍した新たな学習の段階を見比べると、比較にならない程、後者の方が学習する主体にとって困難な課題であると言える。というのも、〈学習Ⅱ〉より上の学習の段階（〈学習Ⅲ〉）は、前述したように、全面的なく自己の再定義にかかわるが故に、学習する主体にとってはのっぴきならない切実な問題——例えば、自己懷疑や自己分裂——を含んでいるからである。

「学習Ⅱで獲得される諸前提が自動的に固められていく性格を持つということは、学習Ⅲが、人間といえどもなかなか到達できないレヴェルの現象であることを示している。」〔Bateson, 1972=1987; 429〕「学習Ⅲは、これら“身にしみついた”前提を引き出して問い質し、変革を迫るものである。」〔Bateson, 1972=1987; 432〕つまり、〈学習Ⅲ〉が〈学習Ⅱ〉と根本的に異なるのは、〈学習Ⅲ〉が、〈学習Ⅱ〉のように、連続的・累積的に経験を積むことを通じて達成されるべきものではなくて、学習する主体が今まで獲得してきた認識の枠組み（諸前提）を自己懷疑し、組み替えていくことになる点に見出される。従って、「〈学習Ⅲ〉とは、〈学習Ⅱ〉の進行プロセス上の変化、すなわち代替可能な選択肢群がなすシステムそのものが修正されるたぐいの変化」〔Bateson, 1972=1987; 418〕と規定されることになる。〈学習Ⅱ〉の段階で獲得した認識の枠組みが、自己定義のレヴェルでは習慣としての自己とみなされる。習慣＝自己（習慣としての自己）は、日常のあらゆる行動をほとんど意識することなく、スムーズに処理していく能力であるため、人間にとって欠くことのできないものであるにもかかわらず、その反面、行動を定型化・パターン化させ、

自己を狭い認識論的な枠組みのなかに閉塞させてしまうことも少なくない。確かに、習慣＝自己には、職人の技芸にみられるように、瞳目すべき秀逸な作品を生み出す能力が秘められているが、一般的には人間のあらゆる行動やものの見方をパターン化させ、自己が自己自身の在り方を問うことの契機を失わせるものと言える。

「私」とは、「性格」と呼ばれる諸特性の集体である。「私」とは、コンテキストのなかでの行動のしかた、また自分がそのなかで行動するコンテキストの捉え方、形づけ方の「型」である。自分があるところのものは、〈学習Ⅱ〉の産物であり、寄せ集めである。〈学習Ⅲ〉レベルに到達し、自分の行動のコンテキストのコンテキストを眼中に収めながら行動する術を習得していくにつれて、「自己」そのものに一種の虚しさ（irrelevance）が漂い始める。経験が括られる型を当てがう存在としての「自分」が、そのようなものとしてはもはや「用」がなくなってくるのである。」〔Bateson, 1972=1987；433〕しかも、「学習Ⅲは、それらの状況例が置かれたさまざまなコンテキストを問題にする。そのはたらきは、学習Ⅱで作られるカテゴリーに対して破壊的である。」〔Bateson, 1972=1987；433〕

2. 二重サイバネティックス・モデルの効用

このように、〈学習Ⅲ〉は、「学習を学習するものの学習」（道元のいう「自己を学ぶ」こと）〔ブラブダ、1986；34〕である。端的に、それは自己の組み替えまたは自己革新を意味する。従って、今後、この〈学習Ⅲ〉を〈自己革新としての学習（過程）〉と呼ぶことにしたい。これについては、Ⅳで詳述することにし、ここでは今まで論述してきた、〈ゼロ学習〉、〈学習Ⅰ〉、〈学習Ⅱ〉、〈学習Ⅲ〉の諸段階の相互関係に関して補充しておくことにする。

ベイトソンは、サイバネティックス・モデルを介して彼の構想する新しい認識論——〈精神の生態学〉——を構築していくわけであるが、そのとき、彼が言う「精神」とは、人間と社会（情報機械も含む）と環境からなる、サイバネティック・ネットワーク（関係の網の目）という広大なシステムを意味している。すなわち、「サイバネティックスで考える一個の内在する精神とは、身体だけに内在するのではない。体外の伝達経路やメッセージにも内在するものである。そしてさらに、そうした個々の精神を、ひとつの小さなサブ・システムとして含む広大な〈精神〉（Mind）がある。この〈精神〉は、神にたとえることができるであろう。実際、これを神として生きている人たちも見出される。ただしこれはあくまでも、

相互につながり合った社会システム全体とこの惑星のエコロジー全体に内在するものである。」〔Bateson, 1972=1987；664〕

従って、このことから彼の把握するサイバネティック・モデルは、〈入力-出力〉という閉じた回路からなる、従来のエンジニアのサイバネティック・モデルとは異なるものとなる。それは、ベイトソン自身がM.ミードと「メイシー会議」（後に「サイバネティックス会議」）について回想しつつ、対談していくなかで提出した次の図によって明らかになる〔Bateson, G., Mead, M., 1976=1987；64〕。

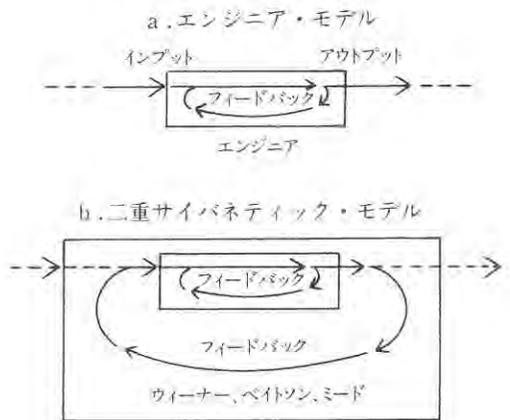


図 サイバネティック・モデルの2つの形態(Batesonによる)

この図をみると明らかなように、aのエンジニアのモデルが、一つの箱で示される、〈入力-出力〉の直線的因果モデルになっているのに対して、bのベイトソンのモデルは、小さな箱の外側にさらにそれを包み込む形で大きな箱が置かれていて、箱が二重になっている。ベイトソン自身、語るように「本質的にはわれわれの生態系、つまり有機体+環境を一つの回路とみなさなければならぬ」〔Bateson, G., Mead, M., 1976=1987；64〕ないため、サイバネティック・モデルは二重になることが不可欠となる。この二重サイバネティック・モデルは、「フィードフォワード」（一次変数の導関数を使った操作）という初期ウィナーの考えを継承したものに他ならない。この二重サイバネティックスは、内部の箱のネガティブ・フィードバック（あるいは単にフィードバック）がさらに外部の箱のネガティブ・フィードバックによって修正されるという二重構造になっている（その応用例として自動操舵機が見出される）。

ベイトソンが従来のサイバネティック・モデルを修正して、このような二重サイバネティック・モデルを提起したことは重要である。というのも、この内部の箱と外部の箱との関係は、〈学習Ⅰ〉と〈学習Ⅱ〉、〈学習Ⅱ〉と〈学習Ⅲ〉の相互関係に各々対応するからである。まず、〈学習Ⅰ〉と〈学習Ⅱ〉との関係であるが、この場合は、〈学習Ⅰ〉の段階の行為は、自己によって自己を修正していく機能をもたないため、それは〈学習Ⅱ〉の段階の行為を通じて一方向的に修正されることになる。従って、この関係にあっては、フィードバックの二重の機能は重要なものとはならず、専ら〈学習Ⅱ〉の段階の行為としての習慣が〈学習Ⅰ〉の段階の行為を安定化させる方向にのみ働く（このとき、前者による後者の修正は、習慣＝自己を安定化させるべく、保守的なものとなる）。自己は現状の自己を強化していこうとするため、自己（習慣）にとって望ましくない散逸（ゆらぎ）は厳しく制御されることになる。

二重サイバネティックスの働きからみて、〈学習Ⅰ〉—〈学習Ⅱ〉の関係が、取るに値しないものであるのに比べて、〈学習Ⅱ〉—〈学習Ⅲ〉の関係は重要である。というのも、「学習Ⅲ（学習Ⅱについての学習）が、学習Ⅱを助長する方向にも、それに制限を加え、おそらくは抑えつける方向にもはたらく」〔Bateson, 1972=1987; 433〕からである。

この記述にみられるように、〈学習Ⅲ〉の段階の行為は〈学習Ⅱ〉の段階の行為を強化するときもあれば、逆に制御することもあるわけだが、これは次の例を通じてより具体的に理解されてこよう。

まず、〈学習Ⅲ〉の段階の行為が〈学習Ⅱ〉の段階の行為をより強化する場合とは、文芸社会学が解明するように〔織田年和, 1984/作田啓一, 1981〕、自尊心を過剰にもつ現代人の一般的な行動のなかに求められる。個人主義に伴う自尊心を身につけた現代人は、自立することを至上の価値とするために、自己自身が他者の生き方や考え方（総じて、欲望）を模倣していると認めること自体、彼自身の自尊心を著しく傷つけることになり兼ねない。しかし、その反面、実際、自尊心に固執する限り、人間関係においてうまく行動し得ないために、何とか他人の言うことに耳を傾けるべく、自己を無理に（＝意識的に）変容していこうとする。このとき、自己は、他人の言うことを（実直に）聞き入れることを自己自身を自立させていくための常套手段としてしまい、かえって現在の習慣＝自己をますます強化させてしまうことになり兼ねないことになる。平たく言うと、この場合、他人の言動を聞き入れることは、自己自身の自尊心を正当化す

るための手段——他人の言うことを素直に聞き入れるだけの品位をもつということをも自分の美德とみなすこと——となる。つまり、この場合であると、〈学習Ⅲ〉の段階の行為を通じて〈学習Ⅱ〉の段階の行為を修正していくことが真の意味で自己変容（自己修正）とはならず、逆に、結果としてみかけの自尊心を肯定し、現在の習慣＝自己（〈学習Ⅱ〉の段階の行為）を強化していくことになってしまうのである。

反対に、〈学習Ⅲ〉の段階の行為が、〈学習Ⅱ〉の段階の行為を制御するときと言うのは、自己が自己のスケールの小さいことに気づいて、自己を変容させる場合であると言える。その体験は「汝自らを知れ」や「自己を習う」という知者の言葉に端的に示されている。例えばそれは、先に示した例とは裏腹に、対話のなかで他者の考え方や生き方を謙虚に聴くことを通じて、現在の自己自身では開示し得ない他者の世界認識や自己理解の在り方をわがものとし、状況を読みとる視点を重畳化していくときである。その体験は状況のなかで自己限定化された自己（習慣＝自己）を他者の柔軟な視点を介して、超えると共に、新たな自己を開くことを可能ならしめる〔中井, 1989; 151〕。聊か、分析的に述べると、今まで α という選択肢群しか知り得なかった自己が、他者の示す β という選択肢群を知ることを通じて、 $\alpha + \beta$ という新たな選択肢群、すなわち論理階型が一段上のコンテクストを認識することによって、今までの自己を包摂していくような広大なシステムを感知し、現在の自己を修正していくことであると考えられる。

これは、日常の相対的な次元での例であるが、自然（宇宙）と人間の関係についての例で言えば、宇宙から帰還した宇宙飛行士たちが、暗黒の、しかも無限の宇宙のなかに美しく輝く小さな地球を見たときの感動——広大な宇宙に漂う地球のか細さ、その地球を庇護する宇宙の神秘——を通じて、宗教的回心に比するほどの自己変容をなし遂げたことが挙げられる〔立花隆, 1983; 120〕。それは自己が、自己を超えると同時に自己を包み込む、より広大なシステム——前述した、有機体+環境という生態系——を感知しながら、それを通じて自己を変容していくこと——精確には、自己が変容させられていくこと——である。宗教体験に「生かされる」という表現が頻繁にみられるが、これはその広大なシステムの存在が感知され、自己を変容した瞬間に生成される生きられた言葉であろう。あるいは、それはベイトソンによって次のように語られている。

「学習Ⅲが、きわめて創造的に展開した場合、矛盾の解消とともに、個人的アイデンティティがすべての関

係のプロセスのなかへ溶出した世界が現われることになるかもしれない。この、宇宙的な相互作用のエコロジーと美とのなかで、生存が成り立つことと自体奇跡的といえようが、このレベルにのぼりつめた人はおそらく、経験の微細なところに意識をフォーカスする術を身につけるなどして、大洋の感覚へ溺れていくことをくいとめているのだろう。微細なディテールのひとつひとつから、宇宙全体の姿が現われてる。』〔Bateson, 1972=1987; 436〕

続くIVにおいて、自己革新としての学習（過程）、すなわち〈学習Ⅲ〉について詳述していくことにする。

IV. 自己革新としての学習

——〈メタファーとしてのダブル・バインド〉を超えて——

1. 関係性の病理としてのダブル・バインド

ⅡとⅢを通じて論述してきたように、ベイトソンのコミュニケーション論は、サイバネティックス認識論（円環的因果モデル）と論理階型としての学習過程論の二つの柱から成る。両者は、自己言及性（または自己組織性）と差異（または差異化）という2つの要素によって関係づけられており、しかもその関係づけの下に学習過程の諸段階が定立されてきたのである。そのなかで〈学習Ⅰ〉と〈学習Ⅱ〉は、従来の学習理論が研究対象にしてきたレベルのものであり、ベイトソンに従う限り、これらは人間の生きられる経験からみると、何ら特筆すべきものは見出せないとい断定し得る。というのも、心理学や生理学等に基づく学習理論そのものが、ベイトソンの言う〈学習Ⅰ〉か、精々〈学習Ⅱ〉の産物でしかないと言えるからである。この意味において、心理学（とりわけ、学習心理学）や行動生理学等は、サイバネティックスの認識論を介して認知科学（あるいは広くAI理論）に代替されてしまうことになるのではなからうか。それらに対して、〈学習Ⅲ〉の段階のレベルは、自己変容をきたすような革新的な内容を含んでいる。〈学習Ⅲ〉、または自己革新としての学習は、ベイトソンによって、美的体験と宗教的な超越的体験の両方向において探究されている（後者については、Ⅲの終わりに宇宙飛行士の例を挙げて触れておいた）。附加すると、ベイトソン自身、美的体験については「原初的芸術のスタイル、グレイス、インフォメーション」という論文〔Bateson, 1972=1986; 200-236〕のなかでバリの民俗芸術を分析することを通じて、また宗教的な体験については「〈

自己〉のサイバネティックス——アルコール依存症の理論」という論文〔Bateson, 1972=1987; 443-484〕のなかでアルコール依存者の回心を宗教的回心と構造的に同じものとみなし、その自己変容のプロセスを分析することを通じて、各々〈学習Ⅲ〉の段階の行為を説明している。しかし、ここではベイトソンのこれらの解釈を手がかりにしながらも、Iで問題提起しておいたダブル・バインド状況、とりわけ「自発的に行動せよ」という子どもたちにとってのつびきならない問題を超越する方途を自己革新としての学習のなかに求めていくことにしたい。それを論ずる前に、ダブル・バインドについて詳述していくことにする。

Iで述べたように、ダブル・バインドが病的な問題として発現してくるケースとして、母親と幼児の関係あるいは精神病をもつ患者とその家族の関係が挙げられる。次に示すものは、ベイトソン自身がダブル・バインドの典型例とみなすものである。

「強度の分裂病発作事件からかなり回復した若者のところへ、母親が見舞いに来た。喜んだ若者は思わず彼女の肩を抱いたが、すると彼女は身体をこわばらせた。彼が手を引っ込めると、彼女は「もう私のことが好きじゃないの？」と尋ね、息子が顔を赤らめるのを見て「そんなにまごついちゃいけないわ。自分の気持ちを恐れることなんかないのよ」と語ってきかせたのである。患者はその後ほんの数分しか母親と一緒にいることができず、彼女が帰ったあと、病院の清掃夫に襲いかかったため、冷水浴を施された。』〔Bateson, 1972=1987; 314-315〕

この例から分かるように、この場面は、「若者が母親の肩を抱く」→「母親が身体をこわばらす」、「若者が手を引っ込めると」→「母親が「もう私のことが好きじゃないの」と尋ねる」、「若者が顔を赤らめる」→「母親が「そんなにまごついちゃいけないわ。自分の気持ちを恐れることなんかないのよ」と言う」の3つに分節化し得る（これを仮に各々、P₁、P₂、P₃とする）。まず、P₁では若者が母親に対して「肩を抱く」という身体言語（バラ言語）を通じてストレートに愛情を示すことに対して、母親はその愛情の表現を受け入れず、「こわばらせる」という身体言語をもって否定している。これがまず、青年自身にとって母親との最初のディス・コミュニケーションとなる。続いて、P₂では今後は青年が母親のそのような冷たい仕打ち（身体言語）を感知して、自分の感情を制止しようとする瞬間、母親は追い討ちをかけるように、言葉を通じて青年に（彼女に対する）愛情の有無を問い詰める。さらに、P₃では母親は彼女が送り出す身体言語と言語の間で身動きが取れなくなってい

る青年に対して、決定的ともいえる言葉を投げかけている。

この状況から分かるように、この母親の青年への対処仕方としては、彼女自身が身体言語（身振りや態度）で表現していること自体が、言葉で表現していることと相反・矛盾していると同時に、言葉による表現内容が身体言語による表現形式によって否定されてしまっている。つまり、この母親と青年のコミュニケーションでは、母親の身体言語による否定的なメッセージが一方向的に優先されている。そして、この母親が抱く青年に対する不信感や冷酷な感情は、表面的には露見されず、むしろ青年の引っ込み思案（P₂）を言葉の上で批判するという形で隠蔽されてしまう。

ただ、冷静にみて青年がこの状況に屈服することなく、それを打開するために選択し得る方法や態度としては一応二通り想定される。そのひとつは、青年が、母親に対して愛情を抱いていることをどこまでも伝えようとするという意志選択であり、もうひとつは、青年が、母親に対して愛情を抱いているが故に、かえってそれを態度で示さないという意志選択である。しかし、よく考えてみると、前者を貫き通すことは、母親のあの決定的な言葉によって釘をさされたことによりすでに困難であり、この対処仕方を通じてこの状況を打開することは到底不可能であろうし、たとえ後者を選択したとしても、青年が母親の二度にわたる言葉に従わないことで彼女自身の叱責をかうことになり、事態をますます悪化させることになり兼ねないであろう。つまり、この青年にとってどちらの方策を選択しても、母親とのきずなは断たれてしまう羽目になる。このように、母親が青年に示す身体言語によるメッセージと言葉によるメッセージとが相反・矛盾し、彼にどっちつかずの宙吊り状態（決定不能性）を強制する事態が、ダブル・バインドと規定されるものの本質に他ならない。ダブル・バインドはコミュニケーションのなかに異なるメッセージが異なるメディア——身体言語（パラ言語）と自然言語——を通じて同時に含まれていて、それを受容する側が混乱をきたす事態を指す。但し、誤解されてならないのは、ダブル・バインドとは、それに陥る人間がメッセージとメタ・メッセージを判別し得ず、従ってメタ・コミュニケーションを操作する能力を欠如しているがために起こる事態というよりは、彼がたとえそのレヴェルの差をある程度判別できたとしても、それでもなおこの状況を打開できず、宙吊り状態（決定不能性）を強いられるときに生じる事態であるという点である。それは、日常よく言われる「そのことはよくわかっていても、（今の私では）どうにもならない」ことを極限化させた状態と考えられる（ここで極

限化された状態とは、自己がこの言明を自覚的に分節化し得ない場合を言う）。従って、ダブル・バインドを単にコミュニケーションにおける論理階型に関する認識能力（メタ・コミュニケーション能力）の欠如または混乱——論理的パラドックスの問題——とみなしてはならない。むしろ、分裂病者であるが故にかえって「ダブル・バインド状態が、《他者》に対する応答においてこそあらわれるのだということ」、すなわち「交換（コミュニケーション）が「命がけの飛躍」〔自分の言うことが、他者に対して別のことを意味してしまうという可能性があるもの〕であること」〔柄谷行人、1986；75〕を体得し、そのことを戦略として実践しているのである。

また、異なるメッセージが同じメディア（例えば、言語）を通じて発せられる場合であれば、情報の送信者はその受信者によって「あなたの論理は混乱している（支離滅裂である）」と忠告されるだけで簡単に処理されてしまうことになる。また、同じニュアンスを示すメッセージが異なるメディアを通じて発せられることは普通一般にみられる健全なコミュニケーションの在り方である（人が怒っている場合、顔をしかめて口調を荒げて怒鳴るのが普通であろう）。

さらに、対人関係においてダブル・バインドが成立するのは、これ以外の外的条件が不可欠である。その条件とは、必ず、社会的にみて優位な人間がそうでない人間に対してコミュニケーションを遂行するという点である。それは多少なりとも権力関係を帯びたコミュニケーションが二者間で遂行される場合——会社の上司と部下等——に生じる。また、権力関係でなくても、禅問答のように、絶対的な権威をもつ禅師が弟子に直面するときに意図的につくり出すダブル・バインドも存在する〔Bateson, 1972=1986；303〕。例えば、弟子の頭上に棒をかざし、厳しい口調で「もしこの棒が実在のものだと言うなら、これでお前を打つ。実在のものでないと言うなら、お前を打つ。何も言わないなら、お前を打つ」と言う場合である。そして、この弟子の場合であれば、手を伸ばし師から棒を取って、師を棒で打つことも選択し得るし、また禅師もこの応待を受け容れるかもしれないのである（前に述べた精神疾患をもつ青年とその母親の関係においてこのことが不可能であるのは言うまでもない）。むしろ、この場面は弟子が自己自身で悟りを開くことによってこのダブル・バインド状況を打開していくべく、禅師によって意図的につくり出されていると言えるかもしれない。権力でなく、権威を生かしながら、ダブル・バインド状況を教育関係に持ち込むという観点からみると、この禅問答の例と、ベイトソンが「バリ島——安定状態

の価値体系」という論文〔Bateson, 1972=1986; 176-199〕のなかで記述した母親と幼児の間に生まれた適度のダブル・バインドの設定とは類似していると言える。参考までにバリ島の養育システムを次に附加しておきたい。バリ島の母親は、子どもを愛撫し、子どもがそれに反応して抱きつきにくる途端、急に態度を一変させ、彼に冷たい素振りをみせたり、ときには自分の子どもの前で他人の赤ん坊に彼女自身の乳を飲ませて、子どもがそれに苛立ち、その赤ん坊を彼女から引き離そうとする様子を何食わぬ顔で平然と眺めたりする。バリ島の母親はこのような育児の仕方を通して、自分の子どもに人間関係に潜勢する内的矛盾を体得させていくのである。ただ、その仕方は度が過ぎてはならず、適度なものであることが必要条件になる。

こうして、バリ島ではその養育システムとして適度なダブル・バインドによる締めつけを導入することによって子どもを社会関係をしなやかに結ぶことのできる人間へと育てていくのである。ペイトソンからみて、バリ島のあらゆる社会生活は競合型のような「累積的な相互作用を阻害する仕組み」〔Bateson, 1972=1986; 196〕になっていて、非活性の負のエントロピー、例えば欲求不満やルサンチマンが溜まりにくくなっている〔山口昌男, 1986; 295-300〕。つまり、バリ島の社会では、ニューギニアのイアトム族の社会のような「分裂生成 (schismogenesis)」〔Bateson, 1972=1986; 178〕がほとんどみられない。このことをG.ドールーズ=F.ガタリは「プラトー (高原状態)」——クライマックスに到達せず、強度が持続する状態——と呼ぶ。

ここからみると、とりわけ、対人関係の作法を充分に学習していない子ども、より精確には、前述した、バリ島のような養育システムのない社会で育つ子どもが、弟子の場合とはまったく異なる意味で、簡単にしかも意図的にダブル・バインド状況に追い込まれることは必定であると考えられる。換言すると、日常、様々な権力関係を強いられている現代人は、日常会話やユーモア等の社交の作法を身につけ、随時活用することでこの状況を何とか相対化し、かつまた打開しているのである。「ユーモアにあっては、用いられる論理階型が突然に変化すると同時に、その変化そのものが識別されることも必要となる。」〔Bateson, 1972=1986; 321-322〕平明に言うところ、ユーモアは抜き差しならぬコンテクストを論理階型のなし崩しという奇襲戦法によって一挙に打開していくのである。それ故、権力関係に置かれること自体、即、ダブル・バインドに陥る十分条件になるとは限らない。前の例で言えば、青年がごく普通の精神状態であれば、母親が身体をこぼらせた瞬間、吐きに「今日はいい天気

だね」とか「お父さん元気になっている」と言って話題を変えることにより、緊張した状況を少しでも緩和させるという選択もできたはずだからである。それが不可能であったというのは、青年が長い期間、特殊な家庭環境に置かれ、強度の精神疾患をきたすほどまで、母親との絶対的な関係に拘束されてきたためであると推察し得る。しかし、ここで考察していかねばならないのは、家庭環境 (家族状況) 等によって生じる病理現象としてのダブル・バインド——R.D.レインの家族を中心とした対人関係論〔Laing, 1961=1975〕やL.ホフマンの家族療法〔Hoffman, 1981=1986〕の研究対象としてのそれ——ではなくて、それが社会の至るところで、みえない形でしかも慢性的に生じている、〈メタファーとしてのダブル・バインド〉である。ここで言う〈メタファーとしてのダブル・バインド〉は、敢えて言うところ、病氣自体が煽り立てる恐怖よりも、それが社会のなかで〈記号〉として機能し、流通するおぞましきや残酷さのイメージ、すなわち〈メタファーとしての病氣〉——「ロマンの苦惱」のイメージとしての肺病や身体を崩壊させるイメージとしての癌 (やエイズ)——の方が人間存在にとってよりリアルな問題であるとみなすS.ソントグの思索〔Sontag, 1977=1982〕に類似していると言える。病理現象としてのダブル・バインドは、臨床的研究の対象または治療の対象であり、特定の患者とそれを取りまく家族状況の問題に過ぎないが、〈メタファーとしてのダブル・バインド〉はより広く現代社会の精神状況全般を表現するリアリティそのものに他ならない。従って、「自発的に行動せよ」というテーゼは、この〈メタファーとしてのダブル・バインド〉を具体的に言い換えたものであると考えられる。

2. メタファーとしてのダブル・バインド

——人格化された社会の背面——

「自発的に行動せよ」という格率は、この命令にメッセージのレヴェルで従った者 (特に、子ども) が、メタ・レヴェルのメッセージ、すなわち「自発的」ということが普通、他者の命令や一般的な規則に従うことなく、あらゆる行動を自分の理性の格率の下に遂行するということに反するよう導く事態を招来させてしまう。さらに深刻なのは、この格率が、メタファー (記号) として社会全般に機能・流通されていて、それが現実的にコミュニケーションの遂行される場の権力関係として発現されるのみならず、子どもをはじめ、現代人の内面に深く、ビルト・インされていることである。これは、自主性・個性を至上の価値理念とみな

す人格化された社会にみられる特殊な事態であると言える。従って、ここで問題化されるのは、個人のなかに内蔵された、「自主的に行動せよ」という矛盾したメッセージをめぐる自己葛藤とその克服の方途である。繰り返すが、現代人は現実的にダブル・バインド状況に拘束され、困惑していると言うよりも、ダブル・バインド状況を無意識の内に自己の内面で引き受け、身動きの取れない吊り状態に置かれていると同時にそのことすら自覚していないと表現した方が正確であろう。つまり、それは不眠症の人間が何とか眠らなければならないという強迫観念（自己意識）に取りつかれ、そのことによってますます眠れなくなるという最悪の事態を引き起こすことに類似している。この最大の原因として「近代に至り、儀式的で外面的なもの（M. ダグラスの言う「非言語的形式による関係」〔Douglas, 1970=1983; 110〕）よりも人間の内的倫理が重視されるようになり、その中で社会関係に関する内省的で言語的思考の習慣が形成され、社会関係がデジタルな思考の対象となるとともにコンテキストとしての関係そのものに言及するようになった〔ことが挙げられる〕。デジタルな思考が生み出す関係イデオロギーは実際のコンテキストと矛盾することも多く、そうした環境の中での社会化はダブル・バインドなものとなる。また、人間が相互作用する際に、現実の関係が形成される以前に思想的に組み立てられた関係が前提とされるという逆転が生じているとも言えよう。」〔阪本俊生, 1989; 128-129〕

このことからみると、現代人が「自発的に行動せよ」という命令を内面化し、それに従って行動すること自体、自己を自己意識によって制御していくと共に、自己と自己を取りまく他者との関係を意識化・デジタル化することによって具体的にかかわる以前からその関係の在り方を規定してしまうことに繋がるものと言える。普通、他者とのスムーズな関係は、沈黙をはじめ、表情、身振り、イントネーション、リズム等、バラ言語を中心とした非言語的なコミュニケーション（アナログ・コミュニケーション）から成り立つものであるが、現代では関係を隠匿的に示す、このメタ・コミュニケーションが、過剰に意識化され、デジタル化されるために、かえってその働きを衰弱させていると言わざるを得ない。例えば、教師が子どもを教育するとき、彼自身が追求するのは常に「良い教育」であって「悪い教育」でないと言われるとき、この教師が子どもとの関係において想定し得るのは、教育的に良い（あるいは正しい）コミュニケーションのみである。関係それ自体、さらに教師と生徒という教育的関係それ自体、本来、良いものでも悪いものでもないにもかかわらず、専ら関係のデジタル化を通じて「良い

教育」が優先されて、「悪い教育」が排除されてしまうことになる。世間一般において、「良い教育」（または「悪い教育」）という矛盾した表現が罷り通るのは、すでに社会において人間関係をデジタル化（二分法化）していく心性が定着しているためである。つまり、その心性とは、個々人が、（彼等にとって）通常意識化され言及化されることがないが故にコミュニケーションが正常に営まれることになる、関係そのもの——関係態としてのコンテキスト——を内省的で言語的思考の習慣の対象にするものに他ならない。しかし、それは関係をデジタル化していく過程で生じる仮象に過ぎない。人間の関係そのものは、二者（あるいはそれ以上の者同士）が実際に相互作用していく以前に、決定されているわけでは決していない。ペイトソンも指摘するように、「われわれ人間は、自分の身ぶりやちょっとしたしぐさを他人にコトバで翻訳されると、非常に居心地の悪い思いをする。関係のメッセージは、アナログ的に、無意識的に、それとなく伝わり合うことをわれわれは望む。関係を意図的に演技でできてしまう人間に、われわれは不信の眼を注ぐわけである。」〔Bateson, 1972=1987; 535〕また、「ノン・ヴァーバルなコミュニケーションの言説がテーマとするのは、愛憎、尊敬、不安、依存など、直接対面している相手もしくは環境世界と自分自身との関係のあり方であるように思える。しかも人間の場合、関係をテーマとする言説に「嘘」が現われることは、精神健康上たいへん好ましくない（関係についての嘘の伝達がノイローゼを引き起こすように人間社会はできている）ようだ。したがって適応の観点からすれば、この種の言説は無意識への依存の程度が大きく、意志のコントロールには不完全にしかゆだねられないかたちで展開されなくてはならない。」〔Bateson, 1972=1987; 596〕つまり、関係をデジタル化すること、すなわち関係それ自体を巧みに操作することは、自己の行動を演出し、他者にわざとらしさという不快な感情を与えてしまうことに繋がる。そのとき、自己の行動は、如何に真剣なものであろうと、他者にとってはJ. ボードリヤールの言う、「シミュラクル」なもの——「ハイパー・リアリズム」——に映じてしまうことになるう〔Baudrillard, 1975=1982〕。「言葉によるメッセージよりも、それに対するコメントとして位置づけられる非言語的なメッセージの方に、人はより大きな信頼を置くのである。」〔Bateson, 1972=1986; 213〕

このように、「自発的に行動せよ」という格率が現代人にとって格率たる所以は、このメッセージが命令的なものとして外側から一方的に発せられるという形式的側面以上に、その内容的側面からみて、まず自己に対して

意識的なレベルで自己自身を制御させるように仕向けていること、また、他者関係に対して自己と他者との関係を意識化・デジタル化させるように仕向けていることの二つが挙げられる。巷に出回る人間関係の手引き書は、人間関係をよりよくするための方法（how to 的なもの）、すなわち人間関係を方法化＝デジタル化したものに過ぎない。これらは今後、人間関係のデジタル化をますます助長させることになろう。「われわれはもはや自己を取り巻く社会関係の象徴的秩序の中にナイーブに安住できず、逆にそれらに対して、しばしば懐疑的にならざるを得ない。」〔阪本俊生，1979；127〕このことにより、現代人は常にダブル・バインド状況に囚われることになる。

それでは、現代人は自己の内面深く浸透したダブル・バインドを如何にすれば克服し得るのであるだろうか。ここで「如何にすれば」や「克服する」という思考形態そのものがこのダブル・バインドそれ自体を強化してしまうことになり兼ねない〔加藤尚武，1987；209〕。というのも、ダブル・バインドが、自己が自己との関係において意識（自己意識）によるコントロールを強化することであると共に、他者との関係において意識化・デジタル化——コミュニケーションのコントロール化——してしまうことを意味するからである。換言すると、ダブル・バインドを超えるためには、意識化していくことにその方途を求めてはならないことが分かる。この場合、ダブル・バインドを「超える」というよりも、「ダブル・バインド状況を適当にやり過ごす」〔浅田彰，1985；106〕というように表現した方が適切であろう。つまり、自己が自己に対して「自発的に行動する」べく強要することを断念し、その観念から自由になることが不可欠になる。端的に言うと、人間関係に関する内省的で言語的思考の習慣＝自己、すなわち〈学習Ⅱ〉の段階の行為を放下することである。自己は自己との関係の遂行においても、他者との関係の遂行においても、「自発性」という選択肢群を自発的に選択していくということに価値を求めず、それとは異なる新たな選択肢群を見出していくことである。自発性という観念に囚われている限り、たとえそれだけが絶対的な価値であり得ないことに気づいても、自発性にかかわる対自己、対他者関係そのものを打開することはできない。しかも、他者との関係においてデジタル化しない、つまり他者との関係において自発性に価値を置かない選択肢群を選択したとしても、他者との関係に自発性を求める最初の選択肢群との間に自発性をめぐってその是非を問ひ質すと共に価値を見出すレベルに留まる限り、「自発的に行動する」ことを美德とする段階から抜け出したとは言えない。というのも、この状況か

ら抜け出すことを自発的に行動したことの証とみなすということもあり得るからである。以上のことから、ダブル・バインドあるいは「自発的に行動せよ」という格率の根深さは、現代人にみられる自尊心の過剰性、すなわち自己以外の如何なるものにも依存しない心性に起因すると言えるが、これはⅢで述べたように、文芸社会学が欲望のミメーシス理論によって説明することとほとんど同じ事態を意味している〔織田年和，1989〕。換言すると、このような心性の最大の問題点は、自己が判断したり行動するとき、何の参照枠にも依拠することがない、あるいはそのような参照枠すらあり得ないこととみなすことにある。しかし、それが現実的でないことは、ペイトソンが示すコミュニケーションとしての遊びを分析すれば、明らかであろう。実は、この遊びのなかに近代人のダブル・バインド状況を超えていく端緒が見出されると考えられる。次に、遊びについてその形式的構造を中心にして論述していくことにする。

3. メタ・コミュニケーションとしての遊びと 〈フレーム〉

——しなやかさと子どもの理性——

今まで論述してきたように、ペイトソンはコミュニケーション（学習過程）のなかに様々な論理階型のレベルを見出し、それらを〈ゼロ学習〉、〈学習Ⅰ〉、〈学習Ⅱ〉、〈学習Ⅲ〉（及び〈学習Ⅳ〉⁴⁾）というように段階づけを行ってきたわけであるが、さらに遊びというコミュニケーションのなかに論理階型があることを次の体験を手がかりに発見している。それはフライシュハッカー動物園でサル生態を観察したときの体験である。

「二匹のサルが〈遊んで〉いた、つまり、個々の動作や信号はケンカの場合と似てはいるのに、それとは同一ではない一連の相互行動をやっていたのである。はたから見ている人間の眼にも、その一連の行為全体がケンカでないのはわかったし、当事者のサル同士にとっても「ケンカではない」ことが、こちらからみてとれた。とすれば、こうした遊びという現象は、当事者の生物にある程度のメタ・コミュニケーションが可能な場合に、言い換えると、「コレハ遊びダ」というメッセージを伝達する信号を交換することが可能な場合に生ずることになる。」〔Bateson, 1972=1986；268〕

これと相同的なものとして、子どもたちが公園等の空いたところに大きな円を描いて境界をつくり、内と外を区別した上で、円の内側を彼等の神聖な場所（住処）と

し、そこで遊ぶ光景が挙げられる。彼等にとってこの内側の空間はまさに彼等のウチであって、円の外側から内側へと入るときには、必ず履き物を脱がなければならない。そして、彼等以外の子ども（あるいは大人）は必ず「お客さん」として振舞わなければならない。この地面の上に描かれた円は文字通り、ベイトソンの言う「枠組み (frames)」〔Bateson, 1972=1986; 273-279, 280-284〕——さらにそれを社会学的に発展・応用させた E. ゴフマンの言う「フレーム」〔Goffman, 1981〕——であって、そのなかで展開される遊びのコンテクストは、このフレーム（枠）によって囲い込まれることになる。遊びのフレームのなかで交換されるメッセージは、それが偽りであり仮象であろうとも、彼等によってあたかも現実的であるかのように扱われる。「コレハ遊びダ」という規則（ルール）はそのフレームの外部にとって何らリアリティを持たないものであるのに対して、内部においては絶対的な力を持つことになる。遊びとしてのコミュニケーションにおいて、フレーム、すなわちコンテクストにおける規則を守らないことは、「ルール破り」として最も重い「罰」を受けることになる。このような子どもたちの遊びが、その外側にいる大人の眼からみて、奇異に感じられると共に真剣なものと感じられるのは、遊びにおけるフレーム（コンテクスト）の特異性のためである。子ども同士が互いに行なう営為が、遊びでありながら、なおかつそれが遊びであることをコンテクストへのメタ言及またはメタ・コミュニケーションな能力を通じて認識しながらも、コンテクストの生み出す規則をそれがあたかも現実であるかのように順守し、取り扱っていくことに、メタ・コミュニケーションとしての遊びの本質が見出される。

実は、このメタ・コミュニケーションとしての遊びのフレームまたはコンテクスト（のルール）にこそ、ダブル・バインドを超える糸口が見出されるのではなからうか。ただ、現代人は前述した自尊心の高さ故に、自己自身の行動が他者の行動やある特定のモデルを模倣したり、参照しているということを認めず、拒否するという性格をもつと言える。従って、前述したように、現代人は自己の行動が如何なるときでも常に自発的に（自立的に）意志決定され、その通りになされていることを信じて疑わないと言える。現代人にとっては子どもたちのようにあるフレームに認識と行動のモデルを求めることは苦痛以外の何ものでもない。というのも、自己の行動が自己以外のフレームに基づいてなされていることを認めてしまうと、自主性や個性という近代的な価値理念に背いてしまうことになるからである。結局、現代人は、この両

者のパラドックスのなかで宙吊り状態を強いられることになるのである。

しかし、一旦、円のなかで無邪気に遊ぶ子どもたちのように、現代人がこのフレームという枠の存在を認識し、それを受容するとき、かえってこのフレームは彼自身にとって不自由なものどころか、自然な行動を可能ならしめる契機になると言える。そのことが取りも直さず、自己の思考や行動が意識する如何に関係なく、トランス＝コンテクスチュアルな状況において様々なフレームによって規定されていることを現代人に自覚させることになる。このフレームは遊びにおいて顕勢化されるが、これ以外のコミュニケーションにおいても少なからずその存在がその内部で行動する人間に示唆されていると考えられる。このフレームは関係をデジタル化させることなく、アナログ・コミュニケーションの次元において関係のメタ言及を可能ならしめるものである。ここまで至ると、関係のアナログ化がほとんどベイトソンの言うエコシステム（全ての関係のプロセス）と同義的なものであることが理解されてくるであろう。というのも、広大なフレームとしてのエコシステムからみる限り、人間の生は有限なものであり、仮象に過ぎないが、それでもそれは無限のエコシステムに包まれることを通じてリアルなものとして映現するからである。このように、自己を取り巻くより大きなシステムの存在に感知することが、人間のなかに自己変容の契機を与えるものと考えられる。この意味において、ベイトソンの言うコミュニケーションは自己変容のプロセスそのものであると言える。遊びがその端緒に過ぎないとは言え、現代人が無邪気に遊ぶ、すなわちメタ・コミュニケーションに没頭する子どものように、しなやかな関係のネットワークを結ぶためには——たとえ、それが一時的なものに留まろうとも、あるいは<学習Ⅲ>の段階に昇りつめた途端に<学習Ⅱ>の段階へと滑り落ちることがあろうとも——、自尊心を放下し、より広大なシステムのなかに自己自身を見出していくという選択しか残されていないのではなからうか。

V. 終わりに

以上のように、この論文では、G. ベイトソンのコミュニケーション論を手がかりにして、<自己革新としての学習>について論述してきた。しかし、本来、コミュニケーション・論は、言葉（メッセージ）の交換のみならず、女性の交換に基づく親族制度や財貨とサービスの交換に基づく経済制度をも内包するものと考えられる。それらについても、ベイトソンは、安定した相互作用、すなわち「互酬性 (reciprocity)」が不均等化すること

によって生じる「分裂生成」——本文において僅かながらふれておいたが——、及びその2つのパターンとしての「相補型」と「対称型」を発見し、両タイプの相互作用をメッセージの交換とまったく同型的に把握しようとしている。また、「ナーヴェン」という儀式は、この分裂生成の生起と促進をコントロールする装置に他ならない。従って、今後は、〈自己革新としての学習〉について、家族制度と経済制度というより具体的なコンテクストにおいて説明すると共に、近代産業社会システム（あるいは近代教育システム）において瓦解しつつある文化装置（文化的仕掛け）について説明することを研究課題としていきたい。そのプロセスにおいて、言葉の交換、女性の交換、財貨とサービスの交換、すなわち言語システム、親族（家族）システム、経済システムの3つのレベルを統合した総合的な相関科学としてのコミュニケーション論が構築されることになろう。

註 釈

- 1) 「自発的に行動せよ」は、P. ワツラウィックの「自発的〔自然発生的〕であれ」〔Watzlawick, 1978=1989; 118/1983=1987; 96-105〕を言い換えたものである。彼は、この類いの指令が「要求されてではなく自発的にのみ生じ得る行為を一人が相手に要求ないし期待する人際的情境においてなされる」〔ibid.〕と述べている。しかも、これが発現する臨床経験とは、「悲しみの禁止と「幸せであれ」の意味を含んだメッセージ」〔ibid.〕である。というのも、両者とも他者から強要されたり、要請されて忘却すべき類いのメッセージでは決してないからである。このように、本来、自然で自発的な現象を意識的にかつ意志の力でそのような現象そのものに到達せしめるべく努力するという行為は、ダブル・バインディングな状況を不可避に招来させてしまうのである。
- 2) 今田高俊によると、自己組織性とは、システムが自己の組織状態をみずからの手で変えていく現象である、あるいは、自分自身のメカニズムに依拠して自己を形成・維持・変化させる能力（自己組織能力または自省作用）の存在を前提とする〔今田高俊, 1987〕。さらに、要約すると、①自己が自己に関係する自己言及現象、②既存の組織状態から逸脱した「ゆらぎ」現象、③来るべき組織状態を先取りする「きざし」現象、の3つの構成要素に分節化し得る。とりわけ、重要なのは、①自己言及現象または自己言及性である。②ゆらぎと③きざしは、I. ブリコジンの「散逸構造の理論」やH. ハーケンの「シナジュエティックスの理論」、あ

るいはP. ヴァレラとU. マトゥラナの「オードボイエシスの理論」等、生命科学の領域に対応する自己組織化現象に他ならない。この点に関しては、別の論稿に譲ることにして、ここでは自己組織性を自己言及性として考察していくことにする。

しかし、このような自己言及性（自己組織性）という観点は、すでに、W. デイルタイを祖とし、ハイデッガーやH-G. ガダマーへと継承される解釈学（精神科学または理解科学）という知の形態のなかに見出される。すなわち、その知の形態は、①解釈学的循環という方法論、②伝統への帰属と疎隔（差異化）という意味把握、③存在完成としての経験（意味形成としての理解）と要約することができる。また、この知は、それ自体隠されたまま発現され、決して言語化（対象化）されることのない知であるという意味において、コンテクスト的知あるいは臨床知と規定し得る〔中井, 1989; 49-79〕。

管見によると、現在の学問は自己組織化パラダイムを共有しつつあると言うよりも、具体的な脈絡、すなわちコンテクストとの繋がりにおいて再構築されつつあると言えるのではなからうか（言語行為論、エスノグラフィー、AI理論〔心の科学の文脈依存性〕、解釈学的社会学、アナール学派、解釈学的文学理論等）。

また、ここで要約した3つの構成要素は、各々、①自己言及性②ゆらぎ③きざしというリアリティをもつ自己組織現象に対応する。ただ、理解科学においては、エネルギーとエントロピーの問題は考慮されていない。つまり、両者の対応関係は形式的に把握したことの結果であると言える。むしろ、生命科学をはじめとする諸科学が、新たな科学観としての自己組織化パラダイムを発見していく過程において、解釈学の3つの構成要素を参照し、組み入れつつあると考える方が適切であろう。ベイトソンが指摘するように、従来の実証科学は、自己組織性（自己言及性）を形式論理（知の直線的因果モデル）の枠組みの下に排除してきたわけであるが、それを時間を含む二重サイバネティック・モデル（知の円環的因果モデル）へと組み替えていくところに、自己組織現象のパラダイムが開かれ、新たな科学が構築されるのである。

- 3) 一般的に、分裂病は妄想型、破瓜型、緊張型の3つの臨床像に分類される。まず、妄想型は隠喩的な過程を通じて現実から脱出しようという型である。次に、破瓜型は伝達されるメッセージをできる限り字義的に受け取る型である。そして、緊張型は自らの内的過程に集中していく型である。いずれもダブル・バインド

から脱出しようとする自己防衛的な戦略に他ならない。これらを言語病理学の観点からみると、妄想型では「バラダイムの軸にそって言葉が横へ横へ繁茂していったグチャグチャになってしまうのに対し、破瓜型ではシンタグムの軸にそって何のふくらみもない表層的な言葉がツルツルツルツル縦に流れていく」〔浅田彰, 1985; 86-87〕ことになる。それに対して、緊張型では「自己の内的過程が恐るべき強度を課され極端に加速されることによって、レヴェルの差もなくなって、すべてが振動しながら白熱して溶けた水銀の流れのようになっていく、そういういわばシンクロトロンのような状態の中から、言葉とか身ぶりがひき白にかけられた破片のようになって素粒子のシャワーのようにパッパッパッと飛び出してくる」〔同上, 1985; 89〕ことになる。とりわけ、A. アルトー（残酷演劇の提唱者）に代表される緊張型の分裂病者がダブル・バインドを脱出していく戦略は、身体がジュラルミンのように溶解してしまうという悲惨な結末となろう。分裂病がとるダブル・バインドを超える戦略については、ドゥルーズ＝ガタリのスキゾフレニー・アナリシスを踏まえながら、より深く考察されるべきであろう〔花村誠一, 1983/1984〕。

- 4) さらに、学習階型論では、〈学習Ⅳ〉と呼ばれる、コミュニケーションの究極的な形態としての「メタローグ (metalogue)」が見出される。ベイトソンによると、「メタローグ」は次のように定義される。「メタローグとは、ある根本的な問題について、単に議論がなされるだけではなく、議論の構造が、その内容を映し出すようなかたちで進行していく会話をいう。・・・進化理論の歴史とは、人間と自然とのあいだで交わされつづけているメタローグにほかならない。進化についての観念のつくられ方、観念同士の相互作用のしかたは、必然的に進化プロセスそのものを映し出しているのである。」〔Bateson, 1972=1986; 28〕すなわち、メタローグとは、「学習を学習するものの学習の置かれたコンテキストの学習（学習Ⅳ）を探る」〔ブラブダ, 1986; 34〕ものに他ならないが、ベイトソン自身、この定義以外にそれを理論的に言及することはせず、娘のM. C. ベイトソンの仮の会話（メタローグ）を通じて具体的に示そうとしている。とりわけ、その会話において主題化されているのは、ベイトソン自身が究極的に追究しようとした聖なるものに他ならない（精神の生態学から聖なるもののエピステモロジーへ）〔Bateson, G., Bateson, M. C., 1987=1988〕。

- 5) 尚、ベイトソンの理論に流れる精神をカリフォルニアという自由な風土において膏で感じとり、それを散文によって示した文献として、〔佐藤良明, 1984/1985/1988/1989〕が参考になる。また、心理学の専門領域からのベイトソンの評価としては、〔十島雅藏, 1989; 198-208〕が参考になる。

文 献 表

- 浅田 彰 1985 『ダブルバインドを超えて』, 南想社。
 Bateson, G., Ruesch, J. 1951 *Communication: The Social Matrix of Psychiatry*, W. W. Norton.
 ——— 1965 *Naven: A Survey of the Problems Suggested by a Composite Pictures of the Culture of a New Guinea Tribe Drawn from Three Points of View*, Stanford University Press.
 ——— 1972 *Steps to An Ecology of Mind*, Harper & Row. (佐藤良明・高橋和久他訳『精神の生態学(上・下)』, 思索社, 1986, 1987.)
 Bateson, G., Mead, M. 1976 *To Tell Margaret the Truth, Co-Evolution Quarterly*. (ブラブダ「まったくもうマーガレット」, 吉福伸逸監修『アメリカ現代思想Ⅲ』, 阿含宗総本山出版局, 1987, 44-86.)
 ——— 1979 *Mind and Nature: A Necessary Unity*, John Brockman. (佐藤良明訳『精神と自然-生きた世界の認識論-』, 思索社, 1982.)
 Bateson, G., Bateson, M. C. 1987 *Angels Fear: Toward an Epistemology of the Sacred*, John Brockman Associates. (星川・吉福訳『天使のおそれ』, 青土社, 1988.)
 Baudrillard, J. 1975 *L'echange Symbolique et la Mort*, Gallimard. (今村・塚原訳『象徴交換と死』, 筑摩書房, 1982.)
 Derrida, J. 1967 *La Voix et la Pheromene*, Presses Universitaires de France. (高

- 橋元昭訳『声と現象』, 理想社, 1970年.)
- Deleuze, G.=Guattari, F. 1972 *L'Anti-OE dipe* (仏)
: *Capitalisme et Schizophrenie*,
Editions de Minuit. (市倉宏祐訳『アン
チ・オイディプスー資本主義と分裂症
ー』, 河出書房新社, 1986.)
- Douglas M. 1970 *Natural Symbols : Expolora-
tions in Cosmology*, Barrie & Rock-
liff. (江河・塚本・木下訳『象徴として
の身体ーコスモロジーの探究ー』, 紀伊國
屋書店, 1983.)
- Goffman, E. 1981 *Forms of Talk*, University
of Pennsylvania Press.
- 花村誠一 1983「分裂病の生の形式ー実用論の要請ー」
村上靖彦編『分裂病の精神病理12』, 東京
大学出版会, 239-263.
- 1984「写しと強度ー分裂病論を超えてー」
現代思想; 12巻5号, 92-102.
- Heidegger, M. 1962 *Die Technik und die Kehre*,
Pfullingen.
- 1976 *Zur Sache des Denkens*, Max
Niemeyer Verlag.
- 1977 *Holzwege*, Vittori Klostermann.
- Hoffman L. 1981 *Foundations of Family Therapy.
A Conceptual Framework for Systems
Change*, Basic Books. (亀口憲治訳
『システムと進化ー家族療法の基礎理論ー』,
朝日出版社, 1986.)
- 今田高俊 1986『自己組織性ー社会理論の復活ー』,
創文社.
- 1987『モダンの脱構築ー産業社会のゆく
えー』, 中央公論社.
- 岩井克人 1985『ヴェニス商人の資本論』, 筑摩
書房.
- 亀山佳明 1989「破局と生成ーコミュニケーション
論についてー」現代社会学, 14巻1号, 100
-118.
- 柄谷行人 1983『隠喩としての建築』, 講談社.
- 1985『内省と遊行』, 講談社.
- 1986『探究 I』, 講談社.
- 加藤尚武 1987『二一世紀への知的戦略ー情報・技
術・生命と倫理ー』, 筑摩書房.
- 木村 敏 1988『あいだ』, 弘文堂.
- 栗本慎一郎 1988『意味と生命ー暗黙知理論から生命
の量子論へー』, 青土社.
- Laing, R.D. 1961 *Self and Others*, Tavistock
Publications. (志貴・笠原訳『自己と
他者』, みすず書房, 1975.)
- 丸山圭三郎 1981『ソシュールの思想』, 岩波書店.
- 長岡克行 1984 a 「二重拘束と三値論理ーあるいは自
己言及のパラドックスとシステム形成ー」
現代思想, 12巻5号, 160-177.)
- 1984 b 「二重拘束と三値論理(承前)ー
あるいは自己言及のパラドックスとシステ
ム形成ー」現代思想, 12巻6号, 212-
229.
- 中井孝章 1989『生活世界の教育理論のためにー実
践知の探究ー』, フレーベル館.
- 中村雄二郎 1983『魔女ランダ考』, 岩波書店.
- 織田年和 1984「ルネ・ジラルドと文学の社会学の
方法」, 作田啓一・富永茂樹編『自尊と懐
疑ー文芸社会学をめざしてー』, 筑摩書房,
217-243.
- 1989「ジラルドとペイトソンー欲望の模倣
論とコミュニケーション理論ー」現代社会学,
14巻1号, 140-155.
- 大沢真幸 1988『行為の代数学ースペンサーーブラ
ウンから社会システム論へー』, 青土社.
- ブラブッタ 1986「グレゴリー・ペイトソン」C+F
コミュニケーションズ編『グローバル・ト
レンド』, TBSブリタニカ, 12-42.
- 阪本俊生 1989「トランス=コンテクストと社会化」
現代社会学, 14巻1号, 119-239.
- 作田啓一 1981『個人主義の運命ー近代小説と社会
学ー』, 岩波書店.
- 佐藤良明 1984「ペイトソンのおけいこ」現代思想,
12巻5号, 140-149.
- 1985「教育につかれて考えるー続・ペイ
トソンのおけいこー」現代思想, 13巻12号,
103-111.
- 1988「人工知能と精神の進化」現代思想,
16巻4号, 144-155.
- 1989『ラバーソウルの弾みかたービートル
ズから〈時〉のサイエンスへー』, 岩波書
店.
- Sontag, S. 1977 *Illness as Metaphor*, Straus and
Giroux. (富山太佳夫訳『隠喩としての病
い』, みすず書房, 1982.)
- Spencer-Brown, G. 1969 *Laws of Forms*, George
Allen and Unwin Ltd. (山口

- 昌哉監修, 大沢・富台訳『形式の法則』, 朝日出版社, 1987.)
- 立花 隆 1983 『宇宙からの帰還』, 中央公論社,
- 立川健二 1986 『《力》の思想家ソシュール』, 風の薔薇.
- 十島雍蔵 1989 『心理サイバネティックス』, ナカニシヤ出版
- 内田隆三 1980 「<構造主義>以後の社会学的課題」思想, 676号, 48-70.
- Watzlawick, P. 1983 The Situation Is Hopeless, but Not Serious: The Pursuit of Unhappiness. (長谷川啓三訳『希望の心理学—そのパラドキシカルアプローチ—』, 法政大学出版局, 1987.)
- 1987 The Language of Change: Elements of Therapeutic Communication. (築島謙三訳『変化する言語—治療コミュニケーションの原理—』, 法政大学出版局, 1989.)
- Wittgenstein, L. 1936-49 Philosophische Untersuchungen, Basil Blackwell. (藤本隆志訳『哲学探究』全集第8巻, 大修館書店, 1976.)
- 山口昌男 1986 『文化人類学の視角』, 岩波書店, (平成元年10月11日受理)

Summary

“Behavior of your own accord” — This maxim indicates modern educational mentality. Apparently, the maxim seems to be justifiable, but thinking about it, it is found that it involves a paradox. Because a child will “behavior of his own accord” literally as an adult (a teacher) order him “behavior of his own accord”, his belief which he “behaviors of his own accord” results in a paradox. Namely the paradox is that the maxim involves incompatible messages. A situation involving incompatible messages — messages of different levels, namely a message and a message (meta-message) concerning a message / a message as a language and a meta-message as a paralanguage (expression intonation, rhythm, body gesture, and so on) — is called by G. Bateson “double bind.” Especially the personalized society bred children are obliged to restrict “double binding situation”. If so how they escape from this situation?

Accordingly this paper has an awareness of the issues involved how modern people escape from superfluous “double blind phenomenon” with theory of communication and logical types of learning process by G. Bateson clue to go on. This theory shows an autonomous learning mode, “learning process as self-transformation (self-innovation)” as called “Learning III” by Bateson. The autonomous learning mode (process) is grounded on “double cybernetics model (the epistemological model of circle cause and effect). Moreover the major principles of the model are founded as “difference” and “self-organicity” or “self-reference”. Both principles enable modern people to escape from “double binding situation” and to transform into a Self. Because “self-reference” signifies that a Self is transformed into a new Self by making approaches to a Self through “difference (information)”.

The content are as follows.

I. Preface

II. Epistemology of cybernetics — Toward a group of problems on “difference” and “self-reference”/“self-organicity” —

1. The end of philosophy and the cybernetics revolution in epistemology and ontology

— On Contemplation in M. Heidegger’s last year —

2. The revolution in epistemology from “the model of the linear cause and effect” to “the model of the circle cause and effect” — The basis on cybernetics epistemology by G. Bateson —

III. The development of logical types theory of learning (process)

1. The construction of learning theory based on logical types

2. The utility of double cybernetics model

IV. Learning as self-transformation — Beyond “double bind as a metaphor” —

1. Double bind as pathology of relativity

2. Double bind as a metaphor — The rear of the personalized society —

3. Playing as meta-communication and “frames” — Flexibility and children’s reason —

V. Conclusion